



重要文化財 木造阿弥陀如来坐像（地蔵院） 春期企画展「火災と高野山—よみがえるその歴史と暮らし」にて展示中

霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第111号

平成26年6月25日発行
 和歌山県伊都郡高野町高野山306
 公益財団法人高野山文化財保存会
 高野山霊宝館
 電話0736-56-2029
 URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■開館時間
 5月1日～10月31日
 8時30分～17時30分
 11月1日～4月30日
 8時30分～17時00分

■休館日
 年末年始のみ

■拝観料 大人 600円
 高・大学生 350円
 小・中学生 250円
 高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり

第35回高野山大寶蔵展

「山の至宝」

—高野山内寺院所蔵名品展—

7月19日（土）～10月5日（日）

第111号 目次

- 大寶蔵展のご案内……………2
- 収蔵品の紹介85……………3
- 高野山の古建築 第十五回……………4
- 高野山霊宝館からのご案内……………5
- 高野山の考古学（三）……………6～7
- 霊宝館の庭園……………8

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

第35回高野山大宝蔵展

「山の至宝」— 高野山内寺院所蔵名品展 —

期間 平成26年 7月19日(土)~10月5日(日)

前期：7月19日(土)~8月24日(日)

後期：8月26日(火)~10月5日(日)



真田幸村書状(天野詣りことわり状) 蓮華定院



勤操僧正像 普門院



阿闍如来立像 親王院

主な出陳品

高野山は、かつて寺院の数が一〇〇〇を越えていましたが、紆余曲折を経て現在は金剛峯寺境内地に一一七の寺院(これらは「塔頭寺院」、あるいは「子院」と呼ばれます)が存在し、弘法大師の法灯を今に伝えています。

本展では塔頭寺院の所蔵品を中心として、高野山の歴史・文化を象徴する名品の数々を展示します。来年の平成二十七年には、開創千二百年を迎える高野山。その魅力の一端を、文化財を通じて是非感じてみてください。

彫刻

- 重文 阿闍如来立像 親王院(靈宝館収蔵後初出陳)
- 重文 屏風本尊 竜光院

絵画

- 国宝 善女龍王像 金剛峯寺(前期)
- 国宝 勤操僧正像 普門院(後期)
- 重文 薬師如来十二神将像 櫻池院
- 重文 八字文殊曼荼羅図 正智院
- 重文 不動明王三童子像 五坊寂靜院
- 重文 五大虚空蔵菩薩像 西南院
- 重文 長尾景虎(上杉謙信)像 清浄心院

工芸

- 重文 灌頂道具類のうち花鳥漆絵竹編筆筒・宝冠 竜光院
- 重文 高野版板木 金剛峯寺
- 重文 菊花牡丹文透彫箱 金剛峯寺
- 重文 梨地金銀蒔絵采配申(武田信玄所持)・漆塗箱 成慶院

書跡

- 国宝 金銀字一切経 金剛峯寺(期間中展示替あり)
- 国宝 統宝簡集卷第37 織田信長朱印状 金剛峯寺
- 国宝 統宝簡集卷第38 豊臣秀吉朱印状 金剛峯寺
- 重文 漢書 大明王院
- 県指定 真田幸村書状(天野詣りことわり状) 蓮華定院

収蔵品の紹介 85

塩釉藍彩髭徳利^{えんゆうあいさいひげどくり}

金剛峯寺蔵 一七世紀前半（ドイツ産）一口

最大径15・5cm 高さ（残存部分）17・0cm



本品は平成十四年（二〇〇二）に行われた、霊宝館の平成大宝蔵（収蔵庫）建設に伴う発掘調査において見つかった出土品のうち、特に異彩を放つ一点です。この、取っ手付きの水差しは髭徳利と呼ばれるもので、首の部分には名前の由来となっている、髭の長い異国風の男性の顔が、その下と側面にはヨーロッパ風の紋章が型押し貼り付けされています。異国「風」という表現は正確ではなく、実際にヨーロッパで作られたものです。胴の紋章はオランダのアムステルダム市のものですが、ドイツ製で、十七世紀にライン地方の町・フレッヒェンで焼かれたとみられています。ザラツとした独特の肌地は塩釉といって、焼成中に窯の中に塩を入れることで作られています。

しかし、なぜドイツのやきものが高野山から発掘されたのでしょうか？

このような髭徳利は江戸時代、鎖国下の日本で唯一、貿易が許されていたオランダ人によって日本に少なからずも

たらされています。ただ、大事なのは入れ物ではなく、中身の方だったようで、ビールやワインを保存・運搬するために用いられていました。そのため中身が無くなれば用ナシ、という訳ですが、その強烈なビジュアルインパクトで当時の日本人に珍重されることとなり、日本国内で模倣品も作られるほどでした。

本品と共に出土した、他の陶磁器は十九世紀中頃（幕末（明治時代））の日本あるいは中国製で、霊宝館の敷地にかつて存在した寺院（明治十五年（一八八二）に火災で焼失した自性院か）で用いられていたと考えられます。防寒のため、般若湯（お酒）をいただくこともあったであろう高野山の僧侶も、さすがに洋酒を飲んでいたとは考えにくく、観賞用として、あるいは奉納品として徳利のみが高野山にもたらされ、伝えられていたのでしょうか。（F）

本品は、春期企画展「火災と高野山―よみがえるその歴史と暮らし」で7月13日まで展示中です。

連載

高野山の古建築

第十五回 県指定文化財 金剛峯寺かご堀

鳴海 祥博



山門右手の「かご堀」 堀に潜り戸と出格子窓が付いている。窓の奥は部屋になっていて、ここに警備の僧が詰めている。



正面東側の「かご堀」 石垣の上に建つ堀は堂々として大寺の風格と威厳に満ちている。壁面には5本の白線が入る。「筋堀」という格式を表す形式である。



「かご堀」の内部 幅が1.7mある堀の内部は空っぽで、まさに「籠（かご）」のようである。中は十分立って歩ける広さで、物入れに利用されている。



西側の「築地堀」 土を叩き締めて築いた堀。表面には5cm程の厚さで積み重ねられた土の層が筋状に残る。堀の表面は黒くなっていて、土を積む時に用いた桧板が剥がれやすいように板に塗った油の痕跡らしい。

総本山金剛峯寺の一郭に建ち並ぶ大主殿など九棟の建物は、一括して和歌山県の文化財に指定されています。今回はその中から「かご堀」を紹介いたします。

かご堀は本山の正面「山門」から左右に建てられています。山門の右手東側に折れ曲がり延べ六三m、左手西側には延べ四九m、そして寺域の西面にも延々九四mにわたって続いています。

堀の高さは約三・三m。正面側の堀は、高さ二・三mの石垣の上に建てられていて、まるで城郭のような豪快さです。ただ城郭と違うのは、堀の壁が黄色に仕上げられ、壁面に五本の白い線が入っていることです。

このような白線の入った堀は「筋堀」と称され、皇族をはじめ特別な格式を象徴する

ものとされています。白線は五本が最上位とされています。確かに高野山内を散策してみると、二本、三本或いは四本の白線を入れた色々な筋堀を見ることができます。

金剛峯寺ではこの堀を「かご堀」と呼んでいます。何故「かご」なのだろうと不思議に思いませんか。それはこの堀の構造に由来しているのです。かご堀の幅は一・七mほどあるのですが、表と裏の表面に厚さ六cmほどの壁土を塗って、内部は空っぽになっています。正に「籠」のような構造になっているのです。

山門の右手には堀を割り抜いて潜り戸が設けられ、脇には堀の壁面に「出格子窓」が付いています。窓の奥、つまり堀の中には小部屋が造られ、警備のお坊さんが四六時中出入りを監視していたのです。内部が空っぽの「かご堀」だからこのような警備室を造ることができたのです。

ところで、寺域の西面を区切る堀は外観は「かご堀」と変わりませんが、中までびっしり土が詰まっています。土を叩き締めて積み上げた土の塊

の堀です。防御という堀の目的からすればもっとも堅牢なものです。これは「築地堀」と称され、古代から続く伝統的な堀で、その構築には大変な労力と技術を必要としました。

幅一・七m、高さ二・五mの土の塊をどうやって築いたのでしょう。伝えられるところでは、両側に厚い木材で枠を組み、枠の中に人が入って木の棒で叩いて土を締め固めます。一回に五cmほどの厚さで叩き締めて繰り返し、高さ二・五mまで五〇層の土が重なっていることになりました。

この堀の境内側に当たる東面では今もこの五cm毎の土の層を見ることが出来ます。また土の表面は黒光りしていますが、これは桧板と土が離れやすいように、あらかじめ桧板に塗った油の痕跡だと考えられています。そのほか築地堀には、土の選び方や配合、叩き締めの方法、桧板の支え方など、秘伝の技があるようで、現在ではそれを再現することは容易ではありません。

正面のかご堀は文久三年（一八六三）の再建、西側の築地堀は豊臣秀吉が青巖寺を創建した文禄二年（一五九三）に築かれたものと推定されます。

高野山文書の調査・整理・ 保存・公開を課題として

高野山霊宝館副館長 山陰 加春夫

平成二十六年（二〇一四）四月一日付で副館長を拝命しました。私は、昭和二十六年（一九五二）高野山に生まれ、大阪市立大学・高野山大学で日本中世史・仏教学を学んだのち、昭和五十七年（一九八二）高野山大学に奉職。爾来、中世高野山史の研究に取り組んでまいりました。

弘法大師の「真影（最古の肖像画）」を安置する御影堂は、九世紀に大師の高弟実恵僧都が創建した御堂です。この御堂は、大師の在世中の姿を彷彿させる建物であっただけでなく、特に十四世紀初頭以降は、金剛峯寺の宝物及び重要文書群を収納する

永久保管庫としても機能しつづけました。御影堂で厳重に保管されてきた文書群の代表として、『宝簡集』・『続宝簡集』・『又続宝簡集』計二七二巻三五〇二通（国宝）があります。

現在、「山の正倉院」と言われるほど、高野山に優れた文化財が数多く伝存するのは、決して偶然ではありません。それは、九世紀以来、現代に至るまでの住僧や有縁の人々が、大師に対する敬慕を胸に、御影堂を初めとする堂塔・宝物・重要文書群を命がけで守ってきたからである、と言うことができます。

保管機能を肩代わりするために、大正十年（一九二二）に開設された施設です。現在、当館には、高野山内各所に伝来してきた文書群のうち、御影堂文書、勸学院文書、本山古文書、宝寿院文書等々、数十万点が収蔵されています。

けれども、なにぶんその量が膨大であるために、なかなか調査・整理が進んでいないのが現状です。そこで今年度から当館は、高野山大学との密接な連携のもとに、「百年の大計」を立て、組織的な調査・整理・保存・公開に鋭意、努めてまいりたく存じます。皆様のご指導・ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

高野山霊宝館からのご案内

これからの催し

○秋期企画展「国を護る神仏」

〔会期〕平成26年10月11日（土）
～平成27年1月12日（月・祝）

主な出陳品

- 重文 五大力菩薩像 普賢院
- 蒙古退治四社明神像 西禅院
- 五大力菩薩像 竜光院
- 兜跋毘沙門天立像 竜光院

○国宝 不動堂公開

〔期間〕8月27日（水）～8月29日（金）
〔公開時間〕9時～16時30分

〔場所〕伽藍 不動堂

〔拝観料〕無料

○重文 徳川家霊台

内部特別公開

〔期間〕11月1日（土）
～11月9日（日）

〔公開時間〕

9時～16時30分

〔場所〕徳川家霊台

（家康霊台・秀忠霊屋）

〔拝観料〕200円

（通常拝観料）

○平成26年もみじ祭

〔期間〕10月～11月



徳川家霊台昨年の公開の様子

展示及び公開内容の詳細は、次号以降の『霊宝館だより』や高野山霊宝館のホームページなどでお知らせいたします。

納骨信仰の展開①

公益財団法人元興寺文化財研究所

狭川 真一

前回に引き続き、第二灯籠堂建設に伴う発掘調査地点の成果をご紹介します。今回は納骨容器が御廟を中心にして弧を描くように配置され、しかもそれぞれが一定の間隔を置いて埋納されていると解説しました。しかし、その中で一か所だけ、納骨器がまとまって埋納されていた集中地点があります。今回はその場所について、分析してみましよう。

集中地点の納骨器

一部は排水管で破壊されていますが、一・五×一・三ほどの三角形の範囲内に、納骨器が集中して埋納されている地点がありました。全部で七基確認されましたが、一基(04)を除いて二〇(三〇)という狭い間隔で埋められているだけでなく、それぞれの穴は重なっていませんでした(04は一群より古い時期のもので、

偶然重なったものと判断しました)。

これは六基の納骨器を、ある時期に意識的にまとめて埋めたことを意味しています。そして、このグループの六基(六人)はそれぞれに深い関係のある人々であつただろうことを想像させるのです。

ところが、ここで不思議なことに気が付きました。この六基の納骨器の年代がバラバラなのです。説明の便宜上それぞれに番号を付けて解説しますと、02は中国製の白磁四耳壺で十二世紀末頃(平安時代末期)のもの、03は高麗青磁の水差しで十三世紀前半頃(鎌倉時代前期)のもの。埋葬にあたって意識的に把手を壊しています。07は中国製の白磁四耳壺で十四世紀前半頃(鎌倉時代後期)のもの。壺の口の部分を壊し、そこに中国製の白磁小皿で蓋をしています。さらに内部にはガラス製(琥珀製か?)の小容器に骨の一部を取

り分けて埋納していたようです。10と16は中国製の白磁四耳壺で十三世紀前半から中頃(鎌倉時代前期から中期)のもので、このうち16は、意識的に口の部分を壊して埋納してました。14は十三世紀前半頃の白磁の小壺だけが埋納されてました。おそらく骨の一部だけが納骨されたのでしよう。

図版では、納骨器を年代順に左から右へ時代が流れるように配置してみました。いずれも輸入陶磁器であることは変わりませんが、一番古いものと新しいものとは、百年以上もの時間差があることとなります。

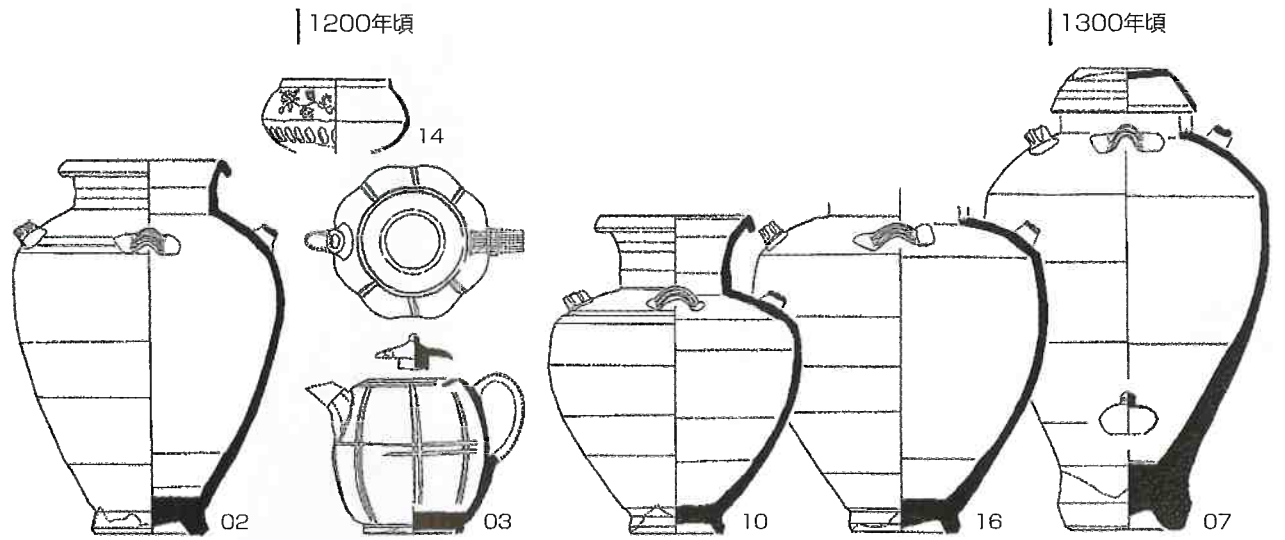
この現象は、死亡した年代の異なる人々をまとめて高野山に改葬(お墓の場所を改めること)したことを物語っています。どこかの墓地かお堂内に順次埋葬(合葬・二人目以降は追葬といえます)されていた人々が、何かのご縁で高野山へ一緒に改

葬されるようになったのではないかと思います。

合葬・追葬の事例を探す

これら六人の方々は、高野山に葬られる以前はどこに埋葬されていた方々かは分かりませんが、前回もご紹介したとおり、すべて輸入陶磁器を納骨器に用いていますので、おそらく平安京在住の皇族や貴族クラスの人たちではないかと思われれます。彼らが採用する埋葬法に、合葬というものがこの時代にあつたのでしょうか。事例を見てみましょう。

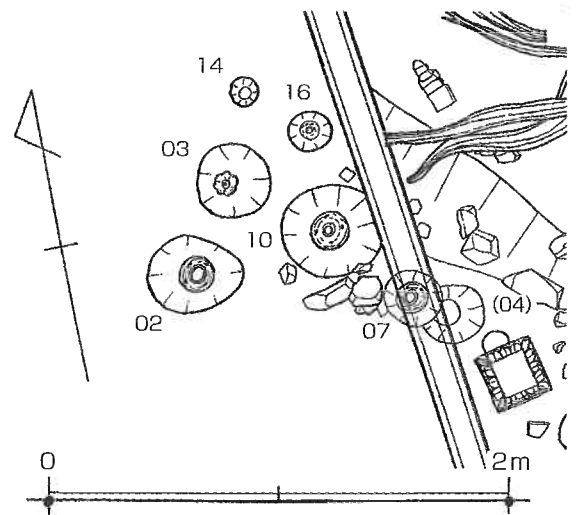
随時追葬して合葬した事例には、京都市伏見区にある後深草天皇深草北陵(一三〇)があります。嘉元二年(一三〇四)に崩御された後深草天皇をはじめ、十二人の天皇の遺骨を一つのお堂に納めたものです(写真)。記録に残るものでは、応徳元年(一〇八



集中地点出土の納骨器実測図(1/5)
 (左が古く、右に向かって新しくなっていく様子を示しています：数字は出土した穴の番号です)



12人の天皇を葬る深草北陵(南から)



集中地点の納骨器出土状況(1/40)

四)に没した白河天皇の中宮藤原賢子の遺骨を上醍醐の円光院本堂の仏壇直下に埋葬したのを皮切りに、郁芳門院(一〇九六年没)、太皇太后宮(一一四四年没)、一品宮(一一三三年没)など所縁の人々を同じ堂の床下に埋葬している例があります(「醍醐寺新要録」)。

集中地点確認の意義

このように、平安時代から鎌倉時代の皇室や貴族の人たちの間には、所縁の人々を同じお堂やその床下に埋葬するという習慣のあったことがわかります。これを踏まえて今回の遺構を考えますと、平安京内のいずこかのお堂に合葬されていた所縁の人々を、鎌倉時代後期頃に高野山奥之院へ改葬したのではないかと考えられます。

高野山への改葬に踏み切った理由は定かではありませんが、その背景には弘法大師への信仰の高まりと、高野山の霊場化があったことは間違いないと思います。

【参考文献】

(財)元興寺文化財研究所 一九八二「高野山発掘調査報告書」

霊宝館の庭園

ナツツバキ・夏椿・シヤラノキ・沙羅木

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ナツツバキはツバキ科・ナツツバキ属の落葉高木です。和名の由来は夏にツバキに似た花をつけること、夏椿の字が当てられています。

別名はシヤラノキ、沙羅木・沙羅・沙羅樹などの字で表記されていることもあります。

この樹種は、本州では太平洋側は福島県・日本海側は新潟県以西、四



夏に咲くツバキ(椿)に似た花

国、九州、朝鮮半島南部に分布しているといえます。

高野山山塊では山頂部の林内に自生しているもの、庭園や堂塔の傍などに植栽されているものを見ることが出来ます。

高野山でも、釈尊(お釈迦さま)の入滅(涅槃)ゆかりの沙羅双樹の代用として聖木扱いされている(いた)こともありま。和名をサラノウジュとする沙羅双樹は、インドやその周辺・熱帯地方の比較的乾燥した地に森林を形成するフタバガキ科のシロと呼ばれている大木となる樹種です。

高野山の植物全般についての参考書・教科書ともいえる著書を遺されている、小川由一氏は、昭和十五年、高野山大学出版部発行の「高野山の植物」では、ナツツバキ(シヤラノキ)がサラソウジュ(沙羅双樹)に当てられた理由の一つとして、山林中に自生して、盛夏の頃に純白の花

を開き、何となく超俗無垢で一種の気品がある。という性状

をあげられ、昭和四十八年・紀伊植物誌刊行会発行の「紀伊植物誌1」には、高野山内に植栽

されているものの中の一株を、「高野山勸学院の西側にある蓮池の南べりに立つシヤラノキは大木ではないが、毎年花が咲くので、人目をひくから、誰もが気づくことと思う」と紹介されています。

その木は現在も樹勢よく、今年五月の実測では幹周八十二センチメートルでした。

その場所は高野山霊宝館や、現在、再建中の中門のすぐ近くです。高野山の山頂部にはナツツバキよ



蓮池の南東べりのシヤラノキ

り花や葉身などが小ぶりなヒメシヤラ(姫沙羅)という同属の樹種も自生しています。成木ではナツツバキの幹皮は灰白色で独特の斑紋がありヒメシヤラの、それは淡赤褐色です。両種とも幹肌が平滑で光沢があり、特に、ヒメシヤラは林中でも目立ちます。

このような、幹の特徴による、さるすべり・さるなめ・さるた・えんたすべりのき、などの方言名も遺っているそうです。